

明治学院バッハ・アカデミー会報（第6号）

巻頭言

芸術監督 樋口隆一

第6号の刊行が遅れ、2017年度、2018年度をまとめてご報告することになってしまったことをお詫び致します。その理由は、2017年秋から、以下のように演奏の機会がつつぎとあり、そのことに追われていたことにありました。

2017年

- 10月9日(月) サントリーホール、ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》演奏会
- 10月15日(日) 本郷中央教会レクチャーコンサート「ルターのコラールを聴く」
- 11月25日(土) アートホール「港区 CC 大学特別演奏会」モーツァルト《戴冠ミサ曲ハ長調》ほか
- 12月2日(土) 白石ホワイトキューブ、モーツァルト《戴冠ミサ曲ハ長調》ほか
- 12月23日(土) 明治学院チャペル「明治学院クリスマス音楽礼拝」

2018年

- 6月2日(月) 紀尾井ホール「バッハ・カンタータ演奏会」
- 10月10日(水) 聖イグナチオ教会、真和会講演会「バッハの人生その音楽とよるこび」、モテット BWV230 ほか
- 11月24日(土) アートホール、港区 CC 大学特別演奏会「バッハとブルックナーの宗教音楽」
- 12月22日(土) 明治学院チャペル、明治学院クリスマス音楽礼拝



ミサ・ソレムニス演奏会（写真:三浦興一）

ベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》は希代の難曲として知られています。合唱団はこの準備に1年以上かけましたが、そのことにより合唱団の実力は飛躍的に向上しました。サントリーホールでの演奏会は大成功に終わり、2018年6月にリリースしたライブCDも『レコード芸術』ですばらしい批評をい

いただきました。

白石ホワイトキューブ創立 20 周年を記念したキューブ合唱団とのジョイントコンサートでは、N 響団友オーケストラとともにモーツァルトの名曲《戴冠ミサ曲 ハ長調》を上演できたのはすばらしいできごとでした。2013 年から 6 回にわたって続けてきたキューブ合唱団とのジョイントコンサートに有終の美を飾ることができました。

紀尾井ホールでの「バッハ・カンタータ演奏会」は、樋口が『新バッハ全集』のために校訂した 3 曲のカンタータを中心とした演奏会。特にカンタータ《神の時は最善の時》BWV106 は、19 世紀以来もともと人気のあるバッハ・カンタータの名曲ということもあって、指揮する私も深い感銘を味わいました。これらのライブ CD も現在制作中です。



バッハ カンタータ演奏会 (写真 : Lasp Inc.)

港区と明治学院大学共催チャレンジコミュニティー大学特別演奏会「バッハとブルックナーの宗教音楽」では、バッハのカンタータ《神の時は最善の時》BWV106 をソロも合唱団員が歌ったほか、ブルックナーのモテットを 5 曲歌えたのはうれしいことでした。ゴットフリート・フォン・アイネム生誕百年シンポジウムで来日されたウィーン楽友協会資料室のオットー・ビーバ教授、イングリット・フックス教授にも聴いていただき、特にビーバ教授からは「日本でこれだけのブルックナー解釈を聴けるとは思わなかった」とお褒めの言葉をいただいたのはうれしく、また励みになりました。この演奏会の最後に歌ったバッハのモテット《すべての異教徒よ、主を誉めまつれ》BWV230 は、2006 年にライプツィヒ国際バッハ音楽祭のうちに聖ニコライ教会で歌った思い出深い曲ですが、10 月には聖イグナチオ教会でも浅井寛子先生のオルガン伴奏で歌うことができ、感動を新たにしました。バッハについての樋口の講演

の中に演奏も織り込んだために、教会関係者はもとより多くの聴衆の皆様に喜んでいただけました。

2017年10月には本郷中央教会でのレクチャーコンサート「ルターのコラールを聴く」も意義深いものでした。ルターの宗教改革500周年を記念したイベントで、樋口が「ルターと音楽」について講演したあと、井上圭子先生のオルガンで、ルター作のコラールを歌い、それにもとづくオルガン作品を聴くという企画でした。

兩年とも、12月の歌い納めは長谷川美保先生のオルガンによる「クリスマス音楽礼拝」でした。恒例となったヘンデルの「ハレルヤ」合唱は、いつ歌っても感動的です。



本郷中央教会

2019年は、8月31日(土)にふたたび紀尾井ホールで、2回目の「バッハ・カンタータ演奏会」を予定しています。樋口が『新バッハ全集』のために校訂した7曲の教会カンタータのうち、残りの4曲を歌います。《祝福したまわずば、われ汝を離さず》BWV157、《至高の善に讃美と栄光あれ》BWV117、《いまぞ、もろびと、神に感謝せよ》BWV192、《わがすべての行いで》BWV97の4曲は、バッハが1727～1734年にライプツィヒで作曲した傑作揃いなので、いまから楽しみでたまりません。みなさまのご来場をお待ちしております。



叶った夢、支えてくださった皆様に感謝

Soprano 大谷雅子

2018年11月24日、場所は明治学院大学構内のホール。樋口先生の指揮に合わせてカンタータ106番の最後の音を奏でた私は、暖かい拍手を受けながら立ち上がり、客席に向かって一礼しました。手にしているのは、合唱譜ではなくリコーダー。20年近くにわたって抱き続けた夢が叶った瞬間でした。

音楽にほぼ縁のない生活を送っていた私が合唱を始めたのは、社会人になった年、大学の同級生に誘われて、(当時の)新星日響合唱団で第九を歌ったのがきっかけでした。その2～3年後、今度は合唱仲間に声を掛けられ、小中学校の音楽の授業以来、十数年ぶりにリコーダーと再会することになります。丁度、何か楽器をやりたいと思っていたタイミング。ヴァイオリンやフルートはハードルが高く、リコーダーなら取り敢えず音が出るから楽しいかな、という軽い気持ちでした。恥ずかしながら、当時の私は管楽器の「タンギング」も知らず、「古楽」や「ピリオド楽器」という概念もありません。それでもドレミから教えていただいて、吹ける曲が少しずつ増えていくのは楽しく、気がつけばリコーダー歴は既に四半世紀を超えました。

一方、樋口先生に初めてお目に掛かったのは 1995 年の春、当時所属していた合唱団で講演してくださった時だと記憶しています。以後、先生の指揮で合唱を歌わせていただくようになり、バッハ・アカデミーができる前年(1999 年)にも、演奏会でご一緒する機会がありました。その時のプログラムの一つが、樋口先生ご自身の校訂による J. S. バッハのカンタータ 106 番「神の時は最善の時なり」(BWV106)でした。この曲の合奏は、リコーダー 2 本、ヴィオラ・ダ・ガンバ 2 挺と通奏低音の編成で、全曲を通してリコーダーが大活躍します。特に冒頭の *Sonatina* でのリコーダー 2 本の掛け合いは美しく、初めて聴いた時から、「いつかこの曲のリコーダーを演奏してみたい」と憧れました。

とはいえ、当時の私はほぼ初心者で、カンタータ 106 番は高嶺の花。また、リコーダーの練習をどんなに頑張ったとしても、合唱団やソリストなどの条件が揃わなければ演奏できない曲ですから、「一生の夢」と言えば聞こえは良いものの、ほとんど「野望」の範疇です。その後、バッハ・アカデミーでも何度かこの曲を演奏する機会があり、私も合唱で参加しましたが、相変わらずプロの奏者が奏でるリコーダーの音色に憧れる状況で、「野望」は「野望」のまま年月が過ぎてゆきました。



チャレンジコミュニティ大学演奏会

そして迎えた 2018 年。バッハ・アカデミーの演奏会が 6 月に紀尾井ホールで開かれることになり、プログラムには樋口先生校訂のカンタータ 3 曲が並びました。もちろん 106 番も含まれています。この演奏会の合奏団は日本を代表する古楽器奏者で構成され、当然ながら私は合唱で参加するわけですが、実は 11 月にもう一度、港区と明治学院大学が連携して運営する「チャレンジコミュニティ大学」(以下、CC)の受講生を対象とした演奏会で、カンタータ 106 番を演奏する可能性がありました。CC の演奏会では、例年、合唱団のメンバーがソリストを務めています。もしかしたら、チャンスが巡ってくるかもしれません。そして、今回そのチャンスをつかめなければ、おそらく「一生の夢」は夢で終わってしまうでしょう。

「可能性」「もしかしたら」「かもしれない」と、不確定要素が多い状況ではありましたが、時々利用しているスイスの楽譜店のオンラインショップを通じて、年明け早々に106番の総譜とリコーダー譜を入手し、密かに練習を始めました。この曲全体で、リコーダーが加わるのは1、2、4曲目。そのうち1曲目(Sonatina)、2曲目のa、b、d、4曲目(終曲)は、譜読みのレベルでは問題なく演奏できましたが、予想していたとおり、バスのソロとの掛け合いになる2cパートで手こずりました。8分の3拍子のリズムの中、16分音符6つの小節が息を継ぐ間もなく延々と続き、和音の進行も目まぐるしく変わります。最近の私は、テレマンの無伴奏ファンタジーやオトテールの組曲など、結構難度の高い曲にも取り組んでいて、譜読みで多少手こずっても、どれくらい練習すれば指が回るようになるか大体的見当はつけられるのですが、やはりJ.S. バッハ、一筋縄ではいきません。正直なところ、最初は「これ、吹けるようになるのかな?」という印象で、なんとか一通り指が回るようになった頃には、季節は春から夏に変わろうとしていました。



愛用のリコーダーと、106番のリコーダー譜、合唱譜、総譜

丁度その頃、CC演奏会のプログラムが決まり、念願のカンタータ106番で、2番リコーダーを吹かせていただけることになりました。吹ける目処が立っていなければ、いくら吹きたくても引き受けられませんから、なんとか間に合った形です。



演奏会当日、カンタータ106番のリハーサル

CC演奏会が近づき、1番リコーダーの大塚照道さん(6月の演奏会で2番リコーダーを担当されたプロのリコーダー奏者)も加わって、オルガン、合唱、ソロとの合わせ練習が始まりました。ここでも懸案になったのは2cパートです。上述のとおり技術的に私が演奏できるギリギリの難度なうえ、リコーダー2本は最初から最後までユニゾン。プロの奏者のセカンドに入る経験も初めてで、音程やタイミングを合わせようとすればするほどプレッシャーが掛かり、初合わせでは、走りまくって演奏を止めてしまいました。

そこで助け船を出してくださったのが大塚さんです。本番までに3回ほど練習で合わせる機会がありましたが、「和音が変わる最初の音でタイミングをとると合わせやすい」、「オルガンの3拍目をよく聴くと走らない」など、毎回1つか2つに絞って、その時の私にピッタリと合う絶妙なアドバイスをください

ました。各回の練習は基本的に曲全体を1回通すだけで、ご自身も演奏していたわけですから、これは凄いことで、プロの演奏家の底力を垣間見せていただきました。

そして演奏会当日。年始から11月までコツコツと積み重ねた練習は、裏切りませんでした。細かいことを言えば、「ここをもう少し...」という部分もありましたが、大過なく演奏を終えることができ、大役を務め上げたすがすがしさと共に、カンタータ106番は、私の「一生の野望」から「生涯の宝物」に変わりました。

抜擢してくださった樋口先生。最初に練習での演奏を聴いた時は、かなり心配されたのではないのでしょうか。オルガンの栗島先生。私の希望を知った先生のお力添えがなければ、CC演奏会での106番は実現しなかったかもしれません。テノール・ソロの伊田さんと、問題の2cパートでバスのソロを歌った高槻さんは、合唱練習終了後の夜遅い時間に、ソリストの合わせ練習にお付き合いくださいました。そして1番リコーダーを引き受けてくださった大塚さん。同門ではないアマチュア愛好家との演奏は、色々とやりにくかったのではないかとお察しします。

さらに、25年以上お世話になっているリコーダーのK先生。実は11月24日は、K先生門下生の発表会当日でもありました。本来なら立場的にそちらへ参加するべきでしたが、事情をお話したところ、「106番なら吹きたいのも分かるよ」と快く送り出してくださっただけでなく、「僕の色をあまり付けない程度に...」と配慮しつつ、106番のレッスンまでしてくださいました。

沢山の方々に支えられて、20年越しに叶えることができた夢。一緒に演奏してくださった合唱団の皆さん、客席で聴いてくださったお客様も含めて、ご関係の皆様すべてに心から感謝いたします。

<おまけ> というわけで、バッハのカンタータ106番をめぐる私の「野望」は大団円を迎えたわけですが、2018年にはまだ続きがありました。バッハ・アカデミーの設立初期に一緒に歌っていた当時18歳の大学生が、その後ドイツに留学して研鑽を積み、教会音楽家になって、バッハの大曲の指揮者を務めるという嬉しい知らせを受けていたのです。その小山田薫さんの招きに応じて、クリスマスを間近に控えた12月下旬、合唱団でバスを歌っている夫及び合唱団OGの友人と共にドイツへ飛び、ライプツィヒ郊外のタウハという街の教会で、現地の合唱団に混じって「クリスマス・オラ



タウハ 聖モーリッツ教会にて、指揮の小山田さんと

トリオ」を歌ってきました。中部ドイツ交響楽団の現コンサート・マスターを含む一流の演奏家が要所を固めたオーケストラの音色は素晴らしく、チェンバロを弾き振りした小山田さんの指揮も見事。若い彼女らしく潑刺とした演奏で、曲が終わると同時に満員のお客様からスタンディング・オベーションが。あの、いつまでも鳴りやまない暖かい拍手は忘れられません。こうした得難い経験ができるのも、音楽を通じて培ってきた沢山のご縁があってこそ。これからも皆様との繋がりを大切にしながら、歌い続けていきたいと思えます。



マタイ演奏会に参加して

Alto 田宮奈々

「マタイ受難曲やるよ、来ない？」発声指導の光野孝子先生に誘われたのが私が明治学院バハ・アカデミー合唱団に参加するようになったきっかけです。当時、他所で単発のヴォイストレーニング講座を受講しており、その講師がバハ・アカデミーでも指導をされている光野先生でした。「メサイヤやってみたいんですよ」と言った私を「なら、、、」と、光野先生が冒頭のセリフで誘ってくださったのです。「サントリーホール、古楽器使用、アルト募集。どう？」と、合唱をする者にはとても魅惑的な単語が並び、その時既に11月で、本番は翌2016年3月というタイミングでしたが、12月より練習に参加し、現在に至ります。



マタイ受難曲演奏会 リハーサル

さて、私の合唱歴をお話したいところですが特別な事をしてきたわけではありません。が、どこで何をしていたかという問いは合唱団に所属しているとたびたび問われますので振り返りますと、母は彼女自身が子供の頃にレコードも出していた童謡歌手だったり、母の妹にあたる叔母も童謡歌手からウィーン国立音大を出た声楽家だったり、ついでに祖母は小学校の音楽教諭というDNAはありますが、私自身は今思うと全く残念なことに何か施されたわけでも何もなく、唯一、小学生の頃だけピアノに練習もせずしぶしぶ通っていた程度です。ただその時のソルフェージュと聴音は今になって譜読み役に立っていると思っています。

その後、中学・高校と通っていた私立のミッションスクールは、朝夕の礼拝に始まり、音楽祭やクリスマス礼拝など、とにかく一年中、全生徒が歌わされている環境で合唱はそこでたたき込まれました。全生徒が歌わされる中で、特に前述したイベント前は朝昼夕のクラスでの自主練が全校内で熱心に繰り広げられ、合唱部(全員が歌うので存在しないのですが)や音高でもあそこまでしているかどうか。そ



マタイ受難曲演奏会 (写真：三浦興一)

合唱にとくに熱意のあったわけでもない私ですが、あるきっかけがあり、ユーオーディアというクリスチャンの合唱団にオーディションを経て参加する事になりました。コンサートでオーケストラと共に奏でる楽曲を聴く一方で「あんな難しい曲よく歌えるな」と思っていました。いざ始めてみると何とかなるもので、楽器は何もできない私ですが様々な曲に声で挑戦することが楽しくなってきました。ちなみにこの時のオーディションの先生は冒頭記載したマタイ受難曲の公演でアルトソロをされた永島陽子先生になります。何か始めると世界は広まるもので、会社関係の合唱団にも参加するようにもなりましたし、冒頭記載した「マタイ受難曲」公演に誘われたことがきっかけで、当合唱団に参加させていただくこととなりました。

最初に参加した練習ではその熱気に圧倒されたことを覚えています。音取りは既に終わっており、第1曲に戻って練習が始まるどころでした。今思うとよくぞあのタイミングでマタイ受難曲を歌おうなどと思ってしまったものだと思います、あの厚い楽譜、3時間に及ぶ演奏時間、ドイツ語歌詞の楽曲理解、、、まるで高い山を目の前にしているようでした。ともかく楽譜は毎日持ち歩き、毎日楽譜を開くものの、大雪で本番まで残り少ない練習が中止になったり(荒天による中止判断が素早いのも当団の特色)果たして公演までにあと何時間練習をする時間が取れるのかと、かつて感じたことのない焦りを覚えたものでした。緊張で迎えた初めてのサントリーホールでの本番でしたが、なんとか3時間を歌いきった達成感是我的合唱活動の自信とキャリアとなりました。

バッハ・アカデミーの練習は毎週月曜の夜に行われています。毎週月曜の夜の練習というのは社員の私にとってなかなか高いハードルですが、逆に練習があるからこそ仕事を切り上げて駆けつけようと、オンオフの良い切り替えになっています。神に捧げられた宗教曲を歌い、



明治学院記念館

ひと時音楽と対峙することで、慌ただしい日常をリセットすることが出来ます。明治学院内の記念館を練習場所として使わせていただけるのは特筆すべきことで、その場の場所の持つ独特の空気の中で練習は誠に贅沢です。そしてなんと言っても芸術監督の樋口隆一先生からの直接のご指導です。これまでの研究やご経験、日常のお仕事から休日のお話しまで惜しみなく披露してくださいませ。合唱は不思議なもので、ひたすら歌って練習していれば良いわけでもなく、合間にある「雑談」が合唱団の音に色を添えるように思います。樋口先生の雑談による学びは毎回の練習の楽しみです。これから楽しんで練習に参加したいと思っています。



私が歌うことが好きな理由と、明治学院大学バッハ・アカデミーのメンバーになった経緯について。

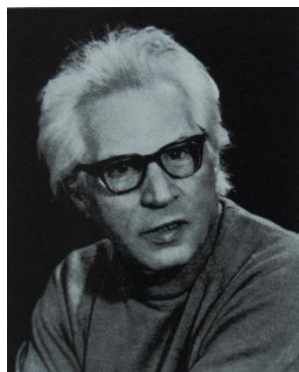
Tenor マンフレート・ヴォダルツ

ドイツの有名な作曲家リヒャルト・ワーグナーはかつて、「最も古く、最も真なる美しい楽器、私たちの音楽がそもそも存在する所以のその楽器は、人間の声である」と言いました。私はそれに同意することしかできません。

私はいつも歌うのが好きでした。幼少の頃より、家の中でも、外で遊んでいる時でも、自然の中でハイキングしている時でも歌っていました。私の両親も、しばしば子供たちと一緒に歌いました。(私には妹が1人と弟が2人います。)クリスマスには、プレゼントを開ける前に必ずツリーの前で歌い、私の母はツイターを、私の父はアコーディオンを演奏したものです。

学校に上がった後は、授業の一環として歌に触れることとなりました。10歳の時にギムナジウムの聖歌隊に参加し、15歳で声変わりするまで、私はボーイソプラノとしてそこで歌いました。

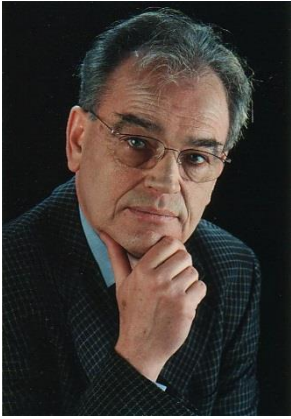
16歳の時、私達の教区、ケルンのヘーエンハウスにある「聖家族教会」にて、私は聖歌隊の一員となりました。教会の聖歌隊の務めは、典礼の歌を通して御ミサにご奉仕することです。そこで私は、シュッツ、パレストリーナ、バッハ、モーツァルト、シューベルトらの合唱作品と初めて出会うこととなります。



フィリップ・レール教授

その後、教会の聖歌隊員の推薦を受けて、私は18歳(1970年)でケルン・フィルハーモニー合唱団に入団しました。この合唱団は、戦後のドイツで設立された最初の聖歌隊の1つです。戦後、文化のおよび音楽的な復興の必要性が高まり、1947年にフィリップ・レール教授によってこの合唱団が設立されました。

レール教授は、1990年に亡くなるまで当合唱団を指揮しました。1990年以降、合唱団の指揮はホルスト・マイナルドゥス教授の手に渡りました。



ホルスト・マイナルドウス教授

ケルン・フィルハーモニー合唱団は、今もなおドイツで最高かつ最も重要なアマチュア合唱団の一つです。1977年まで、私はこの聖歌隊のメンバーでした。そして、所属していた7年の間に、私は偉大な合唱作品の数々に精通する機会に恵まれました。定期的に歌う機会に恵まれたバッハの「マタイ受難曲」をはじめ、他の有名な合唱作品、例えば、バッハ:「ミサ曲 ロ短調」、「ヨハネ受難曲」、「クリスマス・オラトリオ」、ヘンデル:「メサイア」、ハイドン:「天地創造」、「四季」、「戦時のミサ」、モーツァルト:「レクイエム」、「戴冠式ミサ」、ベートーヴェン:「交響曲第9番」、「ミサ・ソレムニス」、ブラームス:「ドイツ・レクイエム」、ヴェルディ:「レクイエム」、ブルックナー:「ミサ曲第2番 ホ短調」、「ミサ曲第3番 ヘ短調」、「テ・デウム」、ドヴォルザーク:「レクイエム」、「スターバト・マーテル」、ロッシーニ:「スターバト・マーテル」、メンデルスゾーン:「エアリア」、フォーレ:「レクイエム」、オルフ:「カルミナ・ブラーナ」、シマノフスキ:「スターバト・マーテル」、合唱団の名誉会員であるゾルタン・コダーイ:「ミサ・ブレヴィス」、同じく名誉会員のルドルフ・ペッツォルト:「ひばり」(初演)、等その他多数の作品を歌いました。



橋本周子女史

1977年、私は日本の地を踏み、以来永住権を獲得するに至るのですが、私がケルン・フィルハーモニー合唱団に所属していた当時、レール教授の生徒として留学されていた日本人の音楽家、橋本周子さんとの出会いが、私を日本へと導いたのです。

彼女は合唱団のリハーサルの際にレール教授のアシスタントを務めていました。その橋本さんのご招待で、私は、彼女がオルガニスト兼合唱団員を務めていた、板橋にあるカトリック板橋教会を訪問しました。当時の主任司祭で、ドイツのフランシスコ会修道士であったゲレオン・ゴールドマン神父様は、橋本さんがケルンで勉強することを可能にし、遠く日本の地を訪れた私を、両手を広げて温かく迎え入れて下さいました。間もなく私は板橋教会の聖歌隊に入り、そこで聖歌隊のメンバーでもあった後の妻・智子と出会いました。1980

年に私たちは結婚し、結婚式はゲレオン神父様の下で板橋教会で行われました。ゲレオン神父様はまた、1984年と1989年に生まれた2人の子供たちに洗礼も施しました。私の人生において、この素晴らしい人物には多くの御恩があります。彼の助けがなければ、私は日本で足がかりを得ることができなかったでしょう。



ゲレオン・ゴールドマン神父



ゲレオン神父様は日本での教会音楽の熱心な後援者だったので、板橋教会では、橋本さんのご指導の下非常に良い教会聖歌隊が構成されていました。もちろん、良い教会音楽には良いオルガンが不可欠なので、ゲレオン神父様は、ドイツ・ボーデン湖畔の街リンダウの有名なオルガン職人ヴィンフリート・アルビーツに、小さな教会に適したオルガンを注文しました。オルガンは1977年秋に日本に到着し、幸運にも私は一緒にオルガンの組み立てを手伝うことを許され

ました。その過程で、私は良い経験を積んだので、1977-78年の冬に今度はカトリック田園調布教会で新しいアルビーツ・オルガンの組み立ても手伝うことができました。こうして、カトリック田園調布教会とのつながりが生まれました。1980-81年の冬に、私たちは二子玉川に転居し、それ以来、板橋教会が遠くなってしまったので、田園調布教会に通うようになりました。それでも、祝祭の折には、私たちは板橋教会の聖歌隊で歌っていました。後になって、私たちは田園調布の聖歌隊「エクレシア」に参加しました。細川裕介さんの指揮の下、バッハ：「クリスマス・オラトリオ」、カンタータ、フォーレ：「レクイエム」、ヴィヴァルディ：「グローリア」、モーツァルト、ブラームス、メンデルスゾーン、シューベルト、ブルックナー、パレストリーナ、ジョスカン・デ・プレ、ラッター、ペルトらの多数の合唱作品の演奏に携わることができました。

2017年2月、悲しいことに、私は最愛の妻・智子を病で失うこととなりました。葬儀は田園調布教会で執り行われましたが、生前の妻の強い希望で、彼女の遺灰をケルンに移し、そこで彼女は6月に埋葬されました。妻を失った苦しみは、ほとんど耐え難いものでした。私は完全に仕事に没頭することで、その苦しみを忘れようとしていました。しかしその後、私は「エクレシア」のメンバーでもあった皆川さんに、彼がメンバーである別の合唱団に参加しないかと誘って頂きました。当時はベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」をリハーサルしていたので、この素晴らしい作品と一緒に歌うというお誘いは非常に魅力的でした。それで私は2017年3月に明治学院大学バッハ・アカデミーの合唱団に出会うこととなりました。ここで私は慰めを見出し、そして合唱団のメンバーの皆様から温かく歓迎して頂きました。樋口隆一教授のご指導の下、毎週月曜日の夜歌の練習に通うことは、単調な日常生活に多くの喜びと刺激をもたらしてくれました。

最初のハイライトは、2017年10月に開催されたサントリーホールでのベートーヴェン：「ミサ・ソレムニス」の公演でした。その後、宮沢賢治の詩をもとに、千原英喜が作曲した日本語の合唱作品「雨ニモマケズ」を勉強して演奏する機会がありました。それまで私は日本の合唱音楽に触れていなかったもので、私にとって興味深い挑戦でした。はじめは日本語の歌詞を覚えるのに苦戦しましたが、数回のリハーサルの後、日本語で歌うことに慣れました。

2017年12月に行われた白石市でのコンサートでは、この「雨ニモマケズ」とモーツァルトの「戴冠式ミサ」を被災地で披露する機会に恵まれ、これが二つ目のハイライトとなりました。その後、2018年6月の紀尾井ホールでの公演に向けて、バッハの3つのカンタータ(BWV 100、106、131)のリハーサルが始まりました。私にとって、「ミサ・ソレムニス」の公演同様、オーケストラに古楽器を取り入れた演

奏形式がとても興味深かったです。

夏休みの後、バッハのモテット「主をたたえよ、すべての異教徒よ」とアントン・ブルックナーの5つのモテットのリハーサルが始まり、2018年11月に明治学院大学のアートホールにてお披露目が叶いました。2019年には、さらに新しくバッハのカンタータのリハーサルが計画されています。私は、合唱団の今後の活動をとても楽しみにしています。ヨーロッパへのコンサートツアーも実現に向けて計画中のことですが、それまでに予定されているリハーサルの数々を、私は心待ちにしています。

合唱団唯一の外国人メンバーとして、最初は馴染めるか不安もありましたが、合唱団の皆様と樋口教授は私をとても温かく迎え入れて下さいました。今では、完全にこの合唱団の一員になれたと感じています。



これからの演奏会のお知らせ

バッハ・アカデミーの今後の活動予定です。詳細が決まる都度ホームページや facebook にてご案内してまいります。皆様ぜひお誘い合わせの上お越しください。

<J.S. バッハ カンタータ演奏会 (第2回)>

日時: 2019年8月31日(土) 14:00 開演(予定)

場所: 紀尾井ホール

指揮: 樋口隆一

曲目: J.S.バッハ カンタータ 《祝福したもうまで、われ汝を離さず》BWV157、《いざやもろびと、神に感謝せよ》BWV192、《至高の宝に賛美と栄光あれ》BWV117、《わがすべての行いで》BWV97



CD 発売のお知らせ

タワーレコード、HMV、TSUTAYA など全国レコード店店頭、および Amazon などネット通販にて好評発売中です。



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン作曲 ミサ・ソレムニス ニ長調 Op.123

指揮 樋口隆一

演奏 明治学院バッハ・アカデミー合奏団

ヴァイオリン 桐山建志

独唱 鷺尾麻衣(S)、寺谷千枝子(Ms)、ジョン・エルウイス(T)、河野克典(Br)

合唱 明治学院バッハ・アカデミー合唱団

2017年10月9日 サントリーホール ライブ録音

2018年6月15日 molto fine レーベルより発売

定価 2,800円(税抜き)



J.S.バッハ作曲 マタイ受難曲 BWV244(1736年後期稿)

指揮 樋口隆一

ジョン・エルウィス(T:福音史家・アリア)、河野克典(B:イエス)、光野孝子(S)、永島陽子(MS)、土田悠平(Br)

合奏 明治学院バッハ・アカデミー合奏団

合唱 明治学院バッハ・アカデミー合唱団、明治学院高校ハイグリー部

2016年3月20日 サントリーホール ライブ録音

2016年11月20日 molto fine レーベルより発売

CD3枚組 対訳・ライナーノート ブックレット付(全60ページ)

樋口隆一「私のバッハ遍歴《マタイ受難曲》」

定価 4,000円(税抜き)



G.フォーレ作曲 レクイエム ニ短調 作品48

指揮 樋口隆一

光野孝子(S)、河野克典(Br)、椎名雄一郎(オルガン)

合奏 N響団友オーケストラ

合唱 明治学院バッハ・アカデミー合唱団

2016年6月21日 サントリーホール ライブ録音

2017年2月22日 Extonレーベルより発売

対訳・ライナーノート ブックレット付(全16ページ)

定価 2,700円(税抜き)



バッハ・アカデミー合唱団 団員募集！

バッハ・アカデミーでは、合唱団メンバーを各パート若干名ずつ募集しています。バッハやバロック音楽、教会音楽に興味をお持ちの方は、ぜひ一緒に歌いませんか。合唱経験があり練習に熱心に参加して頂ける方であれば、所属団体・出身校などにかかわらずどなたでもご参加いただけます。

明治学院白金キャンパスの、東京都港区「有形文化財」「景観上重要な歴史的建造物等」に指定されている伝統ある記念館の会議室にて、毎週月曜の夜に楽しく厳しい練習を重ねています。

随時見学も受け付けています。練習場所は、学校行事(学会、試験、文化祭)などにより変更になる場合がありますので、ご希望の方は事前に下記ホームページよりご連絡ください。

バッハ・アカデミー ホームページ: <http://bachakademie.web.fc2.com/>

facebook ページ: <https://www.facebook.com/明治学院バッハアカデミー合唱団-973803896015459/>

明治学院バッハ・アカデミー維持会報 第6号 2019年1月27日発行